英詩に見る子供の姿（六）

松原至大

「ワン、トゥー、スリー」（ヘンリー・バナー）

それは、それは、お年をとつたお婆さん、
そして三つと半の男の子。
いつしよに遊んでいる樣子が、
見るからに美しかつた。

お婆さんには跳ねて歩けない、
その子にだつて出來はしなかつた。
だつて一つのひざは細く曲つて、
やせた小さな子だつたから。

二人はもみじの木の下で、
きいろい日光の中にすわつていた。
二人がしていたゲームのお話をしよう、
私が見てきたとおりに。

二人がしていたのは「かくれんぼう」、
皆さん、御存じないかもしれないが——
それは、それは、お年をとつたお婆さん、
そして一つのひざが曲つた男の子。

その子は丈夫な右ひざの上に
顔を伏せている。
ワン、トゥー、スリーのあてつこで、
お婆さんのかくれ場所を考えている。

「お祖母ちやん、せと物戸だなの中。」
その子はうれしそうに、くつくと笑つてる。
せと物戸だなの中ではない。
でも、まだトゥとスリーが殘つてる。

「お祖母ちやん、お父ちやんの大きな寢室、
古いへんなかぎのついた箱の中。」

するとお婆さんが「近い、だんだん近い。
でも、まだ當たらないよ。」とおつしやる。
「お母ちやんのものをいつも入れとく、
あのちつちやなお戸だなじやないから——
あの洋服だんすにちがいない、ねえ、お祖母ちやん。」
その子はスリーで、お婆さんを見付けた。

それからお婆さんが指でお顏をかくした、
それはおしわがよつて、白くて小さい。
その子がどこに隱れたか考えている。
ワンとトゥーとスリーとで。

こうして二人は、そこから少しも動かない。
もみじの木の眞下で——
それは、それは、年をとつたお婆さん、
そして小さなひざの曲つた男の子——
かわいい、かわいい、きれいなお婆さん、
そして三つと半の男の子。

これは變つた風景である。それは、それはお年よりのお婆さんというから、百に近いお婆さんかもしれない。お年をとつて、子供のようなかわいい上品なお婆さんが、三歳を半ば出た、片一方のひざの悪い孫と、二人とも身體が自由でないから、ほんとうのかくれんぼうが出來ないので、かわいい言葉の上のかくれんぼうをしている。變つた風景ではあるが、たれの眼にも浮ぶほほえましい風景である。

作者はアメリカの詩人ヘンリー・カイラー・バナー（千八百五十五年——千八百九十六年）で、千八百七十七年から亡くなるまで「パック」という漫畫雜誌を編集していたと傳えられる。從つてこの詩を味う人には、彼の取材の意圖が、自からうなづけるであろう。

ゴッドフリ・ゴードン・ガスタァヴス・ゴーア

（ウィリアム・ランヅ）

ゴッドフリ・ゴードン・ガスタ
ヴァス・ゴーア——
きつと皆さんはこんな名を
聞いたことはないでしよう——
ドアを閉めたことのない子です。

風がぴゆうぴゆう鳴つても、
風がほえていても、
齒がうずいて、のどが痛くても、
それでも彼はドアを閉めません。
お父さんが頼みます、
お母さんがお願いするのです、
「ゴッドフリ・ゴードン・ガスタ
ヴァス・ゴーア、どうか、

ドアを閉めて下さいね。」

お父さんたちは手を固く握りました、
髪をかきむしりました。
それでもゴッドフリ・ゴートン・ガス
タヴァスは、ノーアの浮標(ブイ)のように
耳が少しもきこえません。

彼が外出する時は、家中の者がどなります。
「ゴッドフリ・ゴードン・ガスタ
ヴァス・ゴーア、どうしてお前は
ドアを閉めようと思わないの。」

みんなでよろい戸に帆をかけ、オールをつけて、
ガスタヴァス、ゴーアをシンガポールへ
苦行の船出をさせるとおどしました。

そこで彼はお慈悲を願つて言いました。
「もうしません、よろい戸にのせて
シンガポールへやるのは御めん下さい。
これからドアをしめますから。」

「しめるの。」と、みんなが言いました。
「では陸におきましょう。きつとですよ。
ドアをしめない子は、ひどい病氣になりますよ、
ゴッドフリ・ゴードン・ガスタ
ヴァスゴーア。」

これは「子供のための桂冠詩人」とうたわれたイギリスのウィリアム・ブライトリ・ランヅ(千八百二十三年——八十二年)の作である。彼はヘンリ・ホルビーチ、マッシュー・ブラウンなどのペンネームで、子供のための作品を多く發表した。恐らくこの作は、彼の子供への呼びかけであろう。私どもの家庭においても、いかに多くのガスタヴァス・ゴーアが見出されることか。作中にある「ノーア」というのは、ロンドンを貫いて北海へ入るテイリズ河の河口にある砂州のことである。

なんの草(ワルト・ホィットマン)

これなんの草、と一人の子供が言つた、
兩手でそれを差し出しながら。
どうして私に答えられよう。
私は子供が知る以上に知らないのだ。
それは私の配置の旗にちがいと思う、
希望に滿ちた線の布で織られた旗。
でなければ、神のハンカチーフと思う、
持ち主の名をそのすみすみにしたためて、
心あつて落された香り高い贈物、思い出草、

私たちが見つけて、心にとめて、
これはたれのかと言うように。

これは英詩の形式的傳統を破つて、内在するリズムに強力な詩の生命を托したといわれるアメリカの詩人ワルト・ホイットマン（千八百十九年九十二年）の作。彼の有名な集詩「草の葉」の中に收められている。この詩集は、教師、新聞記者、看護卒（南北戰爭の時）官吏などの生活を送つて、いつも人間の平和主義のために戰つた彼の人間性發展の記錄といわれる。形式的なリズムにとらわれない作品だけに、彼の作の多くは、味う人の努力を必要とする。しかしそれは一部の批評家の言うように、難解であるということにはならないと、私は思うのである。味う人の心の問題である。彼が掘り下げた人間性の深さを、彼が意圖したように、何人にも味到し得るもので、そこに達し得た時の喜びは、詩を味うものにとつて格別のものがある。

子供が無心に示した野の草の一つにも、すぐれた詩人は、このよこに眞劍なものを感ずる。自分自身はこの廣い人生にあつて、一體何にものであろうか。この詩人はそれをこの草の上に見出している。

思い出（フランシス・コーンフォード）

ぼくのお父さんの一人のお友だちが、
いつだつたか、およばれに來た。
上きげんで、いろいろなお話をした。
ぼくにも、お話をして下さつた。
けれど次ぎの週のみんなのお話では、
そのやさしいピンク顏のおじさんが、
亡くなつたとのことだつた。「なんということ……」みんなが言つた。
「あんなよい人が。」
ぼくも、同じように言つた。
「なんということ……」
でもそれから、ぼくは心の底で、
得意になつて考えた。
「ぼく、亡くなつた人を知つているんだ。」

私の乏しい參考書では、作者がアメリカの詩人であることだけしか調べようがなかつた。しかし。平明な中に、子供の心をしつかりと、とらえていることが見のがせないので、私はここに採錄した。讀み流してしまえば、まことに平凡な作という人もあるかもしれない。だが、清純な子供の心の瞬間が、私たち大人の心を痛いまでに打つとは言えないであろうか。